

「紺碧の空に、金色の丸い月」。今、国語の時間に習っている『故郷』にのっている言葉だ。この言葉を初めて聞いた時、私は、なんて美しい響きなのだろう。なんて綺麗な表現なのだろう、と思った。「金色」を「きんいろ」と読むのではなく「こんじき」と読むのも私はすぐく気に入っている。「こんじき」と読むだけで「きんいろ」一色ではなく微妙に違った色が入り混じり輝きだすような気がする。

「紺碧」。青でも紺でも緑でも黒でもない。この音で表す深みのある濃い色の空を想像するだけで心がワクワクしてくる。そして、その空に「金色」の丸い月がかかる。また、それを想像すると、暗闇がスーッと消えて心が晴れやかにウキウキしてくる。私は言葉の魔法にかかってしまう。

また、私の好きな万葉集の歌「茜さす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる」に出てくる「茜色」も、赤やピンク、オレンジ、黄色、紫など色々な色が入り混じった、透き通るように美しい夕焼けの空の色が私の脳裏に浮かぶ。私は、こんな美しい音で、一色では表現できない色を表す日本の色が大好きだ。この他にも漆黒、もえぎ色、亜麻色、瑠璃色、薄紅色、まだまだ色々な色がある。

日本人は俳句や川柳のように短い言葉で、色々な思いや風景、物事などを見事に表す天才である。だからこそ、こんなにも短い音で、こんなにも美しい色の風景を一瞬にして表現してしまうのだと思う。これこそが日本語の素晴らしい魅力ではないだろうか。

昔の人は、自然と共に生き、自然から色々な事を学んだのだろう。今の地球のように、オゾン層の破壊も温暖化もない美しく澄んだ空気の中、鳥や虫の鳴き声、水の音、草木が風で揺れる音を聞く。そこに四季があり、自然で美しい場所で、のんびりと生きていたからこそ、こんな優雅な色彩感覚、美しい音色が生まれたのだと思う。

他にも、日本人は微妙な違いを上手に音で表す。「痛い」をひとつとつても、「ズキズキ痛い」「ガンガン痛い」「ヒリヒリ痛い」「ピリピリ痛い」「キリキリ痛い」痛みを色々な音で区別する。日本人は音に対してもとても敏感なのだと思う。そして、微妙な色の違いも、美しい音の花や動物の名前を上手に選び表現している。珊瑚色、桜色、桃色、藤色、うぐいす色。

でも、今の日本人は忙しさのあまりか、その優雅で気品のある美しい色を、その音色を忘れて人が多いように思う。平安時代からある女性の衣装に、十二単がある。十二色の組み合わせで四季を表現し、その自由自在な色の組み合わせは、外国の人からも絶賛されているらしい。古来の人々から言い伝えられている美しい日本の色、日本人だからこそ生み出したこれらの色をもっと大切にしていきたい。「ピンク」「ブルー」「オレンジ」と言うのでは

なく、日本の色で表現できるようなれたらカッコいいなあと思った。

私たちは、日本語の気品ある音色を誇りに思い、大切に、次の世代の人に伝えていかなければならないと思う。そして、日本語の魅力をもっともっと世界の人々にも伝え、「ツナミ」のように「紺碧」や「茜色」が、世界の共通語になっていければ素敵だなと思った。きっと、私の想像する「紺碧」や「茜色」は、他の人が想像する色とは違うと思う。でも、違っていいと思う。それぞれの「紺碧」があり、それぞれの「茜色」がある。ひとりひとりがそれぞれの色を想像する楽しさこそが日本の色の魔法なのだから。